HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	住民間の対等な話し合いの場の創出 ： 演劇の手法を用いた話し合いのデザイン
Author(s)	平田, 未季
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 27, 5-31
Issue Date	2024-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92238
Type	departmental bulletin paper
File Information	27_p5.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

住民間の対等な話し合いの場の創出
－演劇の手法を用いた話し合いのデザイン－

平　田　未　季

要　旨

本稿では、この特集で展開される「みんなでつくる 多文化えんげきワークショップ in EBETSU」（以下、多文化ＷＳ）の成果を分析するための背景情報を提供する。まず、筆者らが多文化ＷＳを行っている北海道江別市の現状を説明し、多文化ＷＳを始めた背景について述べる。次に、多文化ＷＳの目的とその具体的内容を紹介する。本ＷＳの目的は、コミュニティの多様化と細分化が進む江別市において、多様な住民が互いの視点や考えを共有し、まちについて対等な話し合いを行うことができる場をつくることである。その実現のため、話し合いの前段階で、プロの劇団に演劇の手法を用いたワークおよび寸劇の実演を行ってもらい、さらに、話し合いにおいては、多様な日本語能力を持つ者がやりとりに参加できるよう、通訳に加え、感情カード等の伝達補助ツールを導入した。本稿ではその具体を紹介するとともに、回を重ねる中でどのような課題が生じ、それに伴いどのように寸劇の内容と話し合いのデザインを変更したのかについても記述する。

〔キーワード〕江別市、コミュニティの多様化、演劇ワークショップ、話し合い、共生

1．取り組みの背景

北海道の外国人住民数は[1)]、2023年６月の時点で４万9,152人であり（出入国在留管理庁 2023ａ）、５万人突破が目前である。2023年の北海道全体の人口は約500万人であるため（北海道 2023）、その割合は初めて１％を超えることとなる。注目すべきはその増加のスピードである。北海道では、2022年６月から2023年６月までの１年間で外国人住民数が約8,000人以上増加したが、これは47都道府県中６番目に高い伸び率であった（出入国在留管理庁 2023ｂ）。表１の通り、この１年で特定技能が約２倍に増え、永

住者・留学生を上回ったことからも、その多くが外国人労働者であることが分かる。

表１　北海道の在留資格別外国人住民数の推移

在留資格	2022年６月
技能実習	10,982人（26.8%）
永住者	6,175人（15%）
留学生	4,106人（10%）
特定技能	3,678人（9%）
その他	16,107人（39.2%）

在留資格	2023年６月
技能実習	12,267人（25%）
特定技能	7,179人（15%）
永住者	6,409人（13%）
留学生	4,965人（10%）
その他	18,332人（37%）

（出入国在留管理庁「在留外国人統計」をもとに作成）

筆者らが多文化ＷＳを行う北海道江別市は、札幌市に隣接する人口約12万人の都市である。江別市の外国人住民数は2022年６月の788人から、約100人増え、2023年６月には886人に達した（出入国在留管理庁 2023ａ）。市の住民基本台帳によれば、2024年１月時点では950人に達しており、増加が止まらない状況である。表２に、2023年６月時点の在留資格別・出身地別の人数と割合を示す。

表２　2023年６月の北海道江別市の在留資格別・出身地別外国人住民数

在留資格	人数（割合）
技能実習	168人（19%）
永住者	165人（18.6%）
特定技能	136人（15.3%）
技術・人文知識・国際業務	94人（10.6%）
その他	323人（36.5%）

出身地	人数（割合）
ベトナム	212人（23.9%）
中国	182人（20.5%）
パキスタン	173人（19.5%）
韓国	69人（7.8%）
その他	250人（28.3%）

（出入国在留管理庁「在留外国人統計」をもとに作成）

表２が示す通り、江別市においても技能実習・特定技能の割合は高く、あわせて全体の４割弱を占める。その大半は、市内２か所に存在する工業団地内で製造業（特に食品製造業）に従事しているが、市内に地元の有志が立ち上げた監理団体が存在することから、農業、酪農業、建設業等労働力の安定的な確保が困難な多くの中小企業でも受け入れが広がっている。他地域とは異なる江別市の特徴としては、パキスタンをはじめとする南アジア出身者のコミュニティの存在が挙げられる。江別市には株式会社ＵＳＳが運営するオートオークション会場があり、彼らの多くはその会場の近辺

で中古車販売業を営んでいる。パキスタン出身者は技術・人文知識・国際業務ビザ（以下、技人国）によって来日している者が多く、家族帯同が可能であることからその数を急激に伸ばしている。市の住民基本台帳によれば、2024年１月現在、パキスタン出身者は195人に達し、中国出身者を上回って市内で２番目の数となった。この増加に伴い、市内の小中学校には日本語指導が必要なパキスタン出身の児童生徒が在籍することとなり、彼らへの支援の充実が急務となっている。

筆者は2022年より、市内に住む外国人住民約30名にインタビュー調査を行ってきた（以下、「」内はインタビューにおける発話の引用[2)]）。その中で、日本人配偶者を持つ者をのぞけば、職場の外で恒常的に連絡をとることができる日本人の知人・友人を持つ者は１人もいなかった。彼らの中には、仕事外の時間の孤独を埋めるために友人を欲する者もいたが（「**休みの日、スーパーとか外に出るだけでも十分なんだけど、でも人と話して雰囲気を変えたい**」（ベトナム・技能実習）、「**私は人と話すのが好きな人だけど、ここには友達がいない。毎日母と電話します。１人で家にいたくないから町をずっと歩きます。D（100円ショップ）に２時間いることもあります**」（スリランカ・技人国））、より多くの者は、同地域出身者のコミュニティに強く組み込まれており、日本人を含めコミュニティ外との交流をさほど求めてはいないようであった（「**休みの日は同じベトナムの人と遊びます。よく札幌に行きます**」（ベトナム・技能実習）、「**私たちはビジネスで忙しい。日本語を勉強する時間はないし、仕事でも生活でも日本人と交流しない。ビジネスのために来ているから交流する意味はないと思う**」（パキスタン・技人国））。そのような所属すべき強いコミュニティを持たない者の中には、他の外国人住民との交流を求め、江別国際センターが運営する日本語教室（平田 2023参照）を訪れる者もいるが、教室には２、３名しか学習者がいないことが多いため、彼らが求める人との触れ合いが実現することは少ない（「**（何もすることがないとき）教室に行きます。でも学生はとても少ない。大体２人**」（中国・留学生）、「**教室に行って楽しい雰囲気がないです。でも日曜日に家にいたら何もしないし、休みの日にずっと家にいることはつまらないから、それでも（教室に）行きます**」（ベトナム・技能実習））。また、日本人の配偶者を持ち市に長く住むような者であっても、必ずしも地域コミュニティに溶け込んでいるわけではない（「**私の国と違って、住宅街はいつも静かすぎる。（住民に会って挨拶しな**

ければならないから）ごみ捨てのとき家から出るのが怖いですよ。冬は暗くて鬱になりそう」（韓国・永住者）、「夫とは会話があまりなく１人でいることが多い。時間があるからボランティアとかしたいけど、日本語笑われたら恥ずかしいから（しない）」（香港・永住者））。特に、比較的高齢の方からは、日本語を勉強し直したいと感じながらも、若い人と机を並べて勉強しなければならない（と思われる）日本語教室に行くことへのためらいの声が聞かれた。

一方、市の日本人住民の大半にとって、このように多様化が進む市の現状を知る機会はほとんどない。技能実習生は職場近くの寮やアパートに集住することが多く、また江別で急増するパキスタン出身者は市の郊外に居を構えることが多いため、この増加は多くの住民にとって「見えない増加」である。そもそも、札幌市に隣接する江別市の人口は、2005年以降減少傾向にあるものの、交通・生活の利便性の高さ、および市内に４つの大学がキャンパスを持つことから市外からの現役世代の転入が一定程度あり大幅な減少には至っていない。2019年、2020年には、転入による社会増が自然減を上回り、人口がわずかながら増加したほどである。比較的若い転入者に対し、これまで地域コミュニティを支えてきた自治会や団体の構成員は高齢化が進んでおり、受け入れ側である日本人住民間でも地域のつながりの希薄化が問題化されて久しい。そこにさらに異なる言語のコミュニティが複数加わることで、交わることのない、さらには可視化すらされていないコミュニティが併存する状況が市内に形成され、従来とは質的に異なるコミュニティの細分化が進んでいる[3)]。

2.　住民間の話し合いの場の必要性とその目的

江別市には1996年に設立された国際交流推進協議会があり、その事務局である江別国際センターでは、2018年より市内の全外国人住民に向けた日本語教室が開催されている。また、国際交流推進協議会は、コロナ期に一時中断したものの、発足当初より国際交流を目的とするイベントを定期的に行っており、年に１度開かれる「世界市民の集い」は、世界各地域の料理を提供する屋台やステージでのショーも行われるため市内外から数百名が訪れる。ただし、このイベントはその発足当初から、「外」からの訪問者との交流を通じて市民の国際化を促進することが目的であったため、現在でもイベントの主体は市内にホームステイする短期留学生やＡＬＴ（外国

語指導助手）であり、近年急増する外国人労働者を可視化するようなものではない（江別国際センターの活動経緯について平田 2023参照）。

日本語教室の開設以降、外国人労働者の増加を実感してきた江別国際センターでは、国際交流とは異なる形の取り組みを模索し、2021年から2023年にかけて複数回、筆者らを講師とする外国人住民とのコミュニケーションをテーマとした市民向けセミナーを実施してきた。しかし、このセミナーは、外国人住民が不在であること、また、参加者のほとんどが国際交流推進協議会のメンバー等そもそもこの問題に関心がある者であり、市全体への広がりを欠くことが課題であった。

以上の課題を踏まえ、江別国際センターのスタッフと筆者ら研究者は、市内の住民・コミュニティ間の交流を促し、かつ彼らが生活の場であるまちでの共生について考えることができるような活動を実施することにした。活動のデザインにおいては、以下の２点を重視した。まず、これまでの国際交流イベントとの差異化として、出身や文化の違いという‘異なり’に焦点を当てるのではなく、同じ江別市に住む住民という‘共通点’を前景化する活動を行うことである。次に、日本人住民が外国人住民に地域社会のルールを「教える」という構図ではなく、両者が対等な立場で参加できるような活動を行うことである。

この２点を満たす活動として、江別国際センターと筆者ら研究者は、多様な住民が、互いの視点や考えを共有し、まちについて対等な話し合いを行うことができる場をつくることを着想した。話し合い学を提唱する村田らは、話し合いを、２項対立的に「意見を戦わせる」討論（debate, discussion）とは違い、異なる価値観を持つ人々の意見をすり合わせていくプロセスを重視しつつ、最終的には意思決定に向かう人々のコミュニケーションであるとする（村田・井関 2018：7-8、水上・村田・森本 2023：15-16）。佐藤（2023）は、市民間で行うまちづくりワークショップが持ちうる３つの機能として、①合意形成機能、②協働機能、③自治力向上機能を挙げている。①の合意形成とは、「対等な立場で意見を出し合う」が故に「ときには意見が衝突したりするが、そのような過程を通じて、相互理解と意見調整が図られ」たうえで達成されるものである（佐藤 2023：7）。本実践においても、参加者間の意見の異なりが可視化されるだけでなく、参加者が衝突を辞さずに意見をすり合わせ合意形成を目指すことで、より相互の理解が深まり、地域での協働や自治力向上につながる基盤が構築されると考

え、そのような話し合いの実現を目指す。

近年のコミュニティ・レジリエンスに関する研究では、コミュニティ・レジリエンスを高めるための重要な要素の１つとして、コミュニティに関わる主体の多様性が挙げられている（糸永 2012、前田・高田・森重・西野2015等）。コミュニティの細分化が進む江別市においても、外国人住民に地域コミュニティの主体としての意識を持ってもらうことが重要であると思われるが、１節で述べたように、現状では市の外国人住民の多くが生活の場・就労の場である市に帰属意識を持つことができず、同地域出身者のコミュニティ以外との関わりを強くは求めていない。彼らが市に帰属意識を抱くことができない原因の１つは、そもそも彼らが地域の当事者とみなされていないため、まちについて意見を求められることがなく、基本的な住民サービスさえも十分に行き届いていないことが大きいと考えられる（**「（市役所の手続きが）ぜんぶ日本語。札幌市と違う。いつも社長と一緒に行った」**（ミャンマー・技人国）、**「（保育園で）一生懸命時間に（子どもを迎えに）行った。私は知らなかった、延長（保育）があること。ほかの人はみんな知ってた」**（パキスタン・家族滞在））。市内の支援者の話によれば、市が急増する南アジア出身者を集めてゴミの分別について意見を聞こうとしたところ、集められた者たちから、自分たちに対してつねにゴミ捨てに関する話がなされるが、せっかく市に意見を言うことができる場が設けられるなら、ゴミについてではなくもっと他に話したいことがあるという声が上がったことがあった。この件から、受け入れ側は外国人住民が地域のルールを理解することが共生につながると考えているのに対し、外国人住民の中には、地域のルールを一方向的に教えられる者としての位置づけに必ずしも満足していない者もいることが明らかになった。皆が納得できる共生のまちづくりにおいては、外国人住民のみならず、日本人住民の意識および行動の変容が必要とされるのである。

以上を踏まえ、話し合いの結果生まれる理想的な市のかたちを以下の３点に集約した。

（１）話し合いが目指す市のかたち

ａ．江別市の日本人住民が、外国人住民の増加と外国人住民なしには成り立たない地域の実情を理解し、１人１人が、自らが関わる生活の場・就労の場で、共生のためにできることを主体的に考えるマイ

ンドを養う。

b．外国人住民が、江別市に帰属意識を抱き、今後も市で暮らしていくことを視野に入れ、地域社会へのかかわりを志向する。

c．日本人住民と外国人住民が、地域での共生実現のためにできることを、話し合いを通じてともに考える。

（1 b）の外国人住民に市への帰属意識を持ってもらうことは、1節で述べた特定技能の増加、そして技能実習制度の見直しが進む今、多くの地域でより実際的な課題となっている。特定技能は、技能実習とは異なり、同一職種内であれば労働移動の自由と居住地選択の自由があるため、特定技能の資格を有する労働者は、より待遇の良い職場、そしてより同地域出身者が多い集住地域へ移動していく可能性がある（上林 2020）。実際、市内では、中小企業を中心に、技能実習から特定技能に移行した者が、札幌や東京・大阪等都市部に移動する様子が見られる。市内の中小企業に勤め、技能実習から特定技能に移行したベトナム人男性は、現在の職場の状況を以下のように語った。「**私の会社には3人ベトナム人がいました。今は私だけです。（特定技能の）試験のあと、みんなやめました。これからもうベトナム人は来ないと思います**」（ベトナム・特定技能）。一方で、彼は、江別市という場所が気に入っているため、他の同僚がすべて会社をやめても市にとどまることを決めた。また、カタールでの就労を経て、現在江別市で働くエンジニアの男性は、給料の面で日本は決して魅力的ではないと述べたうえで、江別市に来た理由を以下のように語った。「**お金がたくさんほしいなら、ぜったいに日本に来ない。日本には子どものときからいいイメージがあったから。人が親切とかpoliteとか。カタールは、お金はいいけど（南アジア出身者への）差別があった**」（スリランカ・技人国）[4)]。このように、彼らを職場や地域につなぎとめる要素は、必ずしも経済的合理性だけではない。1節で、北海道および江別市で外国人労働者の受入れが急増している現状を紹介した。この受入れの急増は、北海道の地域経済が外国人労働者の存在なしには成り立たない現状を表しているが、都市部に比べ労働環境が必ずしも良いとは言えない北海道において、今後も受け入れを続け、かつ受け入れた者にとどまってもらうためには、彼らの視点や意見を積極的に聞き、多様な者を包摂しうるまちづくりに取り組むことが欠かせない。

3. 多様な住民間の話し合い実現のために―多文化WSのデザイン

前節の（1a－b）の目的を達成するためには、話し合いの場に、できる限り多くの多様な江別市住民を集める必要がある。しかし、その中には、話し合いという活動に慣れていない者、異文化コミュニケーションの経験を持たない者も含まれうる。そのため、話し合いに先立ち、十分な前準備が必要となる。

話し合いにおけるもう1つの障壁は、参加者間の日本語能力の異なりである。江別市の外国人住民が自らの母語以外で理解できる言語は（英語よりも）圧倒的に日本語が多いため、話し合いは日本語で行うこととしたが、外国人住民の多くにとって、これは「相手言語接触場面（Partner Language Contact Situation）」（Fan 1994、ネウストプニー 1997）であり、言語面のみならず、心理面においても参加者間に圧倒的な非対称性が生じる。特に、近年急増する外国人労働者の多くは、日本語能力が初級前半にとどまる。

以上の障壁を少しでも取り除くため、筆者らはプロの劇団、デザイナーと協働し、話し合いの前に演劇の手法を用いた前準備の段階を設けるとともに、話し合いの場には通訳に加え感情カード（feeling card）等の伝達補助ツールを用意した。

演劇の手法を用いた前準備は、以下の3つの段階に分けられる。まず、初対面である参加者の間に関係性を構築するため、劇団員が演劇稽古の手法を用い、言葉を不要とするアイスブレーキングを行う（表3①）。その後、参加者は4名から6名のグループに分かれ、グループでの意見交換を必要とする共同作業を行う（表3②）。ここでは、日本語能力による非対称性ができる限り生じないよう、声を出すことを禁止しジェスチャーのみでやりとりさせる、使用可能な言葉を3つに限定する等の工夫を加えた。これが後の話し合いのための練習となる。最後に、話し合いのテーマであるまちでの共生について、参加者がテーマを十分に理解し、それに関する地域での具体的経験が想起できるよう、劇団が先述の筆者の聞き取り調査の内容をもとに制作した寸劇を実演する（表3③）。寸劇は、主に住民間でディスコミュニケーションが生じる場面を取りあげており、これがのちの話し合いのための問題提起となる。以上の3つの段階を経ることで、話し合いや異文化コミュニケーションに不慣れな参加者が、多様な者と意見をやりとりする場に入っていく準備ができるようにした。

表３　多文化ＷＳの基本的な流れ

	時間	内容	目的
①	50分	体を動かすワーク	言葉を用いずにコミュニケーションをとるアイスブレーキング
②	15分	共同作業のワーク	言葉を制限しながらグループで話し合い、紙を組み立てる共同作業を行う
③	40分	・劇団員による寸劇鑑賞 ・参加者間で寸劇の台本読み合わせ	地域の接触場面で起きうる課題を体感するとともに、話し合いトピックに関する経験を想起する
④	40分	グループに分かれ、まちについて話し合い	当事者間の話し合いから共生のまちづくりについて考える （参加者の同意がとれたグループは録画・録音）
⑤	20分	話し合い成果の共有	他のグループの考えを知る

以上の①－③（表３）の前準備を経た参加者は、グループごとに机につき、寸劇の問題提起をもとに、共生のまちづくりについて話し合いを行う（表３④）。多様な日本語能力を有する住民が対等に話し合いに参加することを保障するため、各グループに参加者が理解できる言語を母語とする通訳を用意すると同時に、通訳を介さずに参加者同士が直接やりとりできる機会を少しでも増やすため、感情カード等の伝達補助ツールを用意した。感情カードとは、表情を表すイラストもしくは写真と、その表情が表す感情を説明する語が文字で記載された感情伝達を目的とするカードであり、幼児や発達障害児の学習支援ツールとして使用されたり、里親家族と養子間の関係性構築を目指すフォスタリングカードキット『TOKETA』（一般社団法人 福祉とデザイン）のように、コミュニケーションに何らかの課題を抱える者の間の直接的なやりとりを促進するためのツールとして用いられたりする。本活動では、日本語能力がゼロもしくは初級前半レベルの参加者が、通訳の助けを借りずに話し合いの参加者と直接やりとりする機会をつくるため、研究者とデザイナーが共同でオリジナルの感情カードを作成した（カードの詳細については、平田・杜 2023、山本（本特集内）参照）。

話し合いを核とするこの一連のプログラムを多文化ＷＳと呼ぶ。筆者らは、これまでに、江別市で３回の多文化ＷＳを行った。各回の後には、江別国際センターのスタッフ・劇団員・デザイナーと振り返りを行い、さら

に筆者ら談話分析・会話分析を専門とする研究者が多文化WSの核である住民間の話し合いを分析し、多文化WSの内容を再検討した。次節では、3回の実践の概要を紹介するとともに、各回でどのような課題が生じ、それに伴い、どのように寸劇の内容と話し合いのデザインを変更したかについて記述する。

4. 3回の実践と多文化WSの再デザイン

4.1 第1回から第3回の概要

2023年4月から10月にかけて、筆者らは3回の多文化WSを実施した。演劇ワークの都合上、毎回の参加者は20名程度とし、日本人住民と外国人住民が同数参加するようにした。参加者の数が限られてしまう分、見学者を積極的に受け入れると同時に、江別蔦屋書店内のオープンスペースや（第2回）、江別国際交流推進協議会主催の「世界市民の集い」の一角等（第3回）、できるだけ多くの住民の目に触れうる場所で多文化WSを行った。さらに、デザイナーとともに話し合いの成果をまとめた冊子を作成し、市内公共施設・商業施設等に配布した[5)]。

各回の参加者の概要を表4に示す。

表4　第1回－第3回多文化WS参加者の内訳

	第1回（2023年4月）		第2回（2023年8月）		第3回（2023年10月）	
場所	江別市の交流施設		江別蔦屋書店		江別市の公民館	
数	日本人住民13名	外国人住民10名、通訳4名	日本人住民9名	外国人住民8名、通訳3名	日本人住民10名	外国人住民14名、通訳1名
年代	10-70代	10-50代	30-60代	10-40代	20-60代	10-40代
主な属性	高校生、会社員､教員、看護師、主婦等	技能実習生、留学生(大学･高校)､主婦等	経営者、会社員､教員、主婦等	技能実習生、会社員等	大学生、教員、NPO代表、団体職員等	技能実習生、高校生、会社員等
出身	江別市、札幌市等	ベトナム、中国、パキスタン、アメリカ等7地域	江別市、札幌市等	ベトナム、インドネシア、中国、カザフスタン	江別市、札幌市等	ベトナム、インドネシア、中国、アメリカ等8地域

表4の通り、各回の参加者は年代も属性も出身地も多岐に渡る。これらの参加者のほとんどは初対面である。また、参加した外国人住民各の日本語能力はほぼ初級レベルであった。以下の節では、このような参加者の間

で対等な話し合いを実現させるために行った前準備としての寸劇の内容と伝達補助ツールの使用について説明し、さらに各回で生じた課題について述べる。

4.2　第1回―共存か共生か

4.2.1　第１回の話し合いの狙い

第１回は通訳を含め27名が参加し、５グループに分かれて話し合いを行った。第１回の話し合いのテーマは「共存か共生か」である。１節で述べた通り、江別市では、多くの日本人住民が地域の多様化の現状を認識しておらず、また多くの外国人住民が地域コミュニティとの交流を志向していなかった。この状況を受け、第１回の話し合いでは、参加者が、交わりのないコミュニティが併存する「共存」で良いのか、それともコミュニティ間で交流し協力し合いながら同じまちの住民として「共生」していくことを目指すのかを考えること、「共生」のために１人１人ができることは何かを話し合うことを目標とした。

4.2.2　第１回の寸劇

問題提起となる寸劇では、多くの参加者が馴染みを持つであろうゴミステーションを舞台とし、そこで日が経つにつれ、住民間のやりとりが変化していく様子を描写した。

（２）第１回寸劇シナリオの一部（ゴミステーション１日目）[6)]

日本ではない、どこか。５月、快晴。ゴミを捨てる日の朝。
舞台の真ん中あたりにゴミステーションがあり、Ａがホウキで掃除している。

Ａ：（掃除している）・・・・・！（と、人が来るのに気づく）

そこにＢが現れる。Ｂは、ゴミを捨てるために来る。
（中略）見知らぬ二人。
ＡはＢを見る、が、ＢはＡを見ない。

Ａ：（挨拶をしようと笑顔で会釈）

Ｂ：（笑顔と会釈に気づくが、反応せずに、ゴミを捨てて去る）
Ａ：（見送る）‥‥

寸劇ではこの後、ＡとＢのやりとりが生じないまま終わるパターンと、ＡがＢに挨拶をして無視される２日目、ＡがＢに話しかけＢが会釈のみをする３日目、Ｂがトラブルを抱えＡに助けを求めＡとＢの間にやりとりが生じる４日目までが演じられるパターンとが提示された。前者は「共存」のまち、後者は「共生」のまちをイメージした描写である。

当日は、日本語および参加者が理解する３言語に翻訳されたシナリオが配布された。参加者は寸劇を見た後、日本人住民と外国人住民でペアを組み、シナリオをもとにそれぞれの場面を２人で演じ、Ａ・Ｂ両方の視点から２つのパターンのまちを体感した。

図１　ペアでの練習

図２　ペアでの実演

4.2.3　第１回の話し合いにおける工夫

寸劇の鑑賞・実演ののち、参加者は４名から６名の５つのグループに分かれ、話し合いを行った。話し合いの開始に先立ち、運営側は、以下の４つの問いを日本語と英語で与えた。これらの問いは口頭での説明に加え、日本語および参加者が理解する３言語で会場前面のホワイトボードに掲示された。問いの内容は以下の通りである。

（３）第１回の話し合いに先立ち与えられた問い
ａ．今、自分が住んでいる町内と、町内での自分をイメージしてください。シナリオのどの場面が今の状況に一番近いですか。
ｂ．そのとき、どんな気持ちですか。感情カードを使ってグループの人に説明してください。

c．みなさんが「こうなったらいいな」と思う町内は、どんなものですか。

d．理想のまちにするために、「みなさん」が「自分のまちで」できることは何ですか。

（３ａ、ｂ）は寸劇パートと話し合いを接続する問いである。（３ａ）の問いにより、参加者は寸劇から得た視点を持って自分たちが住むまちを見直し、さらに（３ｂ）の問いでそのまちに住む自分はどのような気持ちであるのかを参加者に説明する。この過程で、「共存」もしくは「共生」に近いそれぞれのまちの状況が共有されること、また同じ状況であっても人によって感じ方は異なることが可視化されることを期待した。（３ｃ）は「共存」「共生」のいずれかを選ぶための問いである。最後の（３ｄ）は、（３ｃ）で選んだ理想のまちの状況に近づけるために、自分たちは何ができるのかを考えるための問いである。

話し合いでは、３つのツールが使用された。まず１つ目は多言語併記のシナリオである。（３ａ、ｂ）の問いに答える際、参加者はシナリオを参照し、それを指さしたりしながら、意図を伝えた。２つ目は先述の感情カードである。各参加者は感情カードのセットを手元に持ち、（３ｂ）の問いに答えるためこのカードを使用した。３つ目は図３に示す模造紙である。各グループの机の中央には、「＋」（肯定的感情）と「－」（否定的感情）とに二分された模造紙が置かれた（図３参照）。この模造紙は、参加者の１人が（３ｃ）の理想のまちについて語る際、他の参加者が「＋」もしくは「－」のエリアに感情カードを置くことで、ある者が理想とするまちに対する他者の感情が可視化されることを狙ったツールである。このツールの使用を通し、参加者が、誰にとっても理想的なまちは存在しないことを理

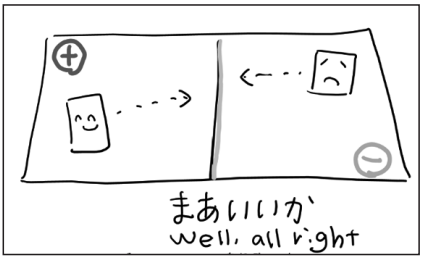

図３　参加者に提示された説明のための図

図４　ツールを用いた話し合いの様子

解し、話し合いによって、「まあいいか」という妥協ラインを目指して意見をすり合わせていくことを期待した。

4.2.4 第１回の問題点

第１回実施後にはできるだけ多くの参加者に口頭で感想を聞くとともに、運営者の間で振り返り会を行い、さらに研究者らで話し合いの様子を録画した映像を確認した。その結果、以下の問題点が明らかになった。

（４）第１回の問題点

ａ．参加者が、寸劇で提示される場面を身近なものとして捉えられていない。

ｂ．参加者が話し合いの指示((３ａ－ｄ))を十分に理解できていない。

ｃ．参加者が感情カードや模造紙の使い方を十分に把握できていない。

ｄ．「共存」を好む者、「共生」を好む者それぞれの意見が尊重される結果、意見のすり合わせが生じない。

（４ａ）について、話し合いの中では「ゴミステーションでそもそも人に会わない」「ゴミステーションで誰かと会話しようと思わない」等の意見が出、参加者が寸劇の設定にリアリティを感じることができなかった様子が観察された。また、同じグループに外国人住民がいるにもかかわらず、「外国人住民がいれば挨拶をしたいけれど、そもそも私の町内には外国人住民がいない（ので、このような場面は生じない)」と言い切る日本人住民も多く、寸劇を通してもなお、共生を我がまちのこととして捉えられていない様子も見られた。（４ｂ、ｃ）に関して、話し合い開始時に「何をすればいいの？」という確認から入るグループが多く、話し合いが始まってからも手順を何度も確認する様子がみられた。最も深刻な問題は（４ｄ）である。２節で、話し合いを、「異なる価値観を持つ人々の意見をすり合わせていくプロセスを重視しつつ、最終的には意思決定に向かう人々のコミュニケーション」と定義した。しかし、第１回の話し合いでは、それぞれが提示する理想の町について、参加者の間で意見の異なりがあったとしても、「そういう感じ方もあるよね」とその異なりが肯定されるにとどまり、話し合いが‘みんな違ってみんないい’という状態を超えて異なる「意見のすり合わせ」や、グループとして「意思決定」するというプロセ

スに進むことがなかった。

4.3　第２回―コミュニケーション不足による断絶を乗り越える

4.3.1　第２回の話し合いの狙い

第２回は通訳を含め20名が参加し、４グループに分かれて話し合いを行った。第２回の話し合いのテーマは「コミュニケーション不足による断絶を乗り越える」である。第１回では、江別市の現状を踏まえ「共存」か「共生」かの選択をテーマとしたが、前節で述べた通り、話し合いは、「共存」を望む者もいれば「共生」を望む者もいるという異なる価値観の共有にとどまった。そこで、第２回の寸劇では、コミュニケーションの不足が引き起こすまちでの問題を提示し、「共生」の状態が望ましいということを前提として、話し合いでは、どうすれば住民間のコミュニケーション不足を補えるかを考えてもらうことにした。

4.3.2　第２回の寸劇

第１回の寸劇で提示したゴミステーションで住民がやりとりをするという場面は、多くの参加者にとって身近に起こりうることとして捉えられなかった（4.2.4節（４ａ））。そこで、第２回の寸劇では、多くの者がまちで実際に体験したことがあるであろう出来事を提示するようにした。その１つは公共の場における大声での会話である。以下、Ａは日本人住民、Ｂ・Ｃは外国人住民を想定している。

（５）第２回寸劇シナリオの一部（日常編）

Ａ　「ある晴れた日の午後、近くの公園のベンチで静かに読書をしていたら‥」

Ａがベンチで、読書している。ＢとＣの笑い声がして、二人が現れ、もう一つのベンチに座る。

Ｂ　「キャハハハ！ピヨピヨピヨ！ソーへ！！」
Ｃ　「アハハハ！チェペロッパン！クレハ！チェッペ！」
（中略）
ＣＢ　「ギャハハハー！！」

A　「うるさいっ！！（去る）」
BC　「ワオ」
A　「なんか、なんかなんか、こっちか公園でくつろいでる時にいきなり現れて、隣に人がいることを何も考えずに、理解出来ない言葉で、ギャアギャアうるさくされたら、なんかイラつきません？どうです？そんな経験ありません？」

この後、逆に日本人住民であるAが電車で大声で話しそれにBがとまどう場面が提示され、さらに、A・B・Cが普段から地域で挨拶を交わす仲でありB･Cの大声での会話をAが微笑ましいものと受け止める場面が続く。以上は、交流がない相手の行動は容認しがたいのに対し、少しでも交流がある相手であれば同じ行動でも容認可能性が上がることを示している。さらに、寸劇の最後では、災害が起きたときの避難所での地域住民と新たな転入者の間のやりとりが描写された。

（6）第2回寸劇の一部（避難所編）[7)]

（前略）
BとCがヒソヒソ話している。

C　「あれ都会人か？にしたってはんかくせぇ。あれだばしぇやみこぎだわ」
B　「あんましみんでね！ごしゃがれるかもしらんど。なんも喋らないも、なんだかおっかねぇ」
A　「なんて言っているかは全く分からなかったけど、どうやら良く思われてないらしいということだけは分かって、もっと心細くなった。自分も悪いのだと思うけど、不安すぎて、遠くで暮らす友人とずっと連絡を取りあっていた」

A、ポケットからスマホを取り出し、電源を入れ、静かにスマホをいじる。BとCの冷たい視線がAにささる。

C　「こったらときに、気楽なしゃけべぇ！」
B　「ごしゃがれるかもしらんどぉ！！」

（6）もまた、普段のコミュニケーション不足が住民間の衝突を引き起こす場面である。この後の話し合いでは、どのようにすればこの避難所での衝突が避けられたのかを考えてもらった。

4.3.3　第2回の話し合いにおける工夫

第2回の話し合いで使用されたツールは、多言語併記のシナリオ、感情カード、指示カード、付箋の4つである。第1回の話し合いでは、話し合いの開始とともに多くの情報と新たなツールが紹介されたため、参加者が情報を消化できないまま話し合いに臨むことになった（4.2.4節（4 c））。そこで、第2回では、話し合いに先立ち感情カードの使用に慣れてもらうため、先述の寸劇の直後に、今の寸劇を見た感想を参加者に感情カードで示してもらうというワークを設けた。

図5　寸劇後カードを見せ合う参加者

第2回で新たに導入された指示カードとは、話し合いの各段階で行ってほしいことをカードの形で示したものである。これは、第1回で、話し合いの前に行った指示が参加者に十分に理解されていなかったこと（4.2.4節（4 b））を反省し作成したものである。図6に示す通り、指示カードは、表面に数字（1～3）が、裏面には話し合いの進行を促す問いが日本語を含む4言語で書かれている。参加者には、1つ目の問いについて十分話し終えたと感じたら、次のカードをめくり、新たな問いに進むよう説明した。

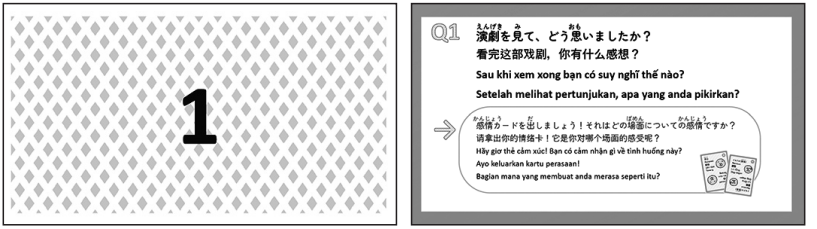

図6　第2回指示カードの表面と裏面

指示カードで示した問いは以下の通りである。

（7）第２回の話し合いで指示カードにより与えられた問い

a．演劇を見て、どう思いましたか？
　感情カードを出しましょう。それはどの場面についての感情ですか？

b．最後の「田舎の避難所」のようにならないためにはどうすればいいでしょうか。できるだけたくさんアイディアを出してください。ふせんにアイディアを「一言」で書いて、皆さんに見せてください。（どの言葉でもＯＫ！）

c．今までのアイディアの中で、あなたが、自分のまちで、明日からできることはどれですか。

（７ａ）は、寸劇鑑賞の後に行った感情カードを提示するワークの繰り返しである。ただし、この段階では、なぜその感情を抱いたのか説明をすることも求められる。次の（７ｂ）は、共生のまちづくりに向けたアイディア出しである。ここで、４つ目のツールである付箋を使用した。付箋は参加者間で意見等を「外在化」し「共有」するための有効なツールであるが（森本 2017：92)、書くという作業に時間がかかりすぎることを避けるため、第１回では導入しなかった。しかし、互いの意見を文字で残すことができる、即時的に音声で発話ができなくても自分のペースで意見を書き提示できるという付箋使用のメリットは、多様な日本語能力の者を含む話し合いの場でこそ生かされると考え、第２回での導入に至った。付箋の使用にあたっては、日本語以外の言語で意見を書いても良いということを強調した。（７ｃ）は、第１回で実現できなかった「意見のすり合わせ」と「意思決定」のプロセスを引き起こすための問いである。実現可能性という指標を導入することで､参加者が互いのアイディアに関する意見を述べ合い、より適当なアイディアを選択していく中で、意見の集約に至ることを期待

図７　指示カードと感情カード

図８　付箋にアイディアを書く参加者

した。

4.3.4　第２回の問題点

第２回では、指示カードを各グループに配布したことにより、話し合いで行うべきことが明確になり、参加者が何をしたらいいのかとまどう様子は見られなかった。また、寸劇の直後と話し合いの開始時に同一のワークを行ったことで、両者の接続がスムーズになり、第１回のように参加者が都度シナリオを見直し内容を確認することもなかった。また、寸劇の内容も、参加者にとって実際と乖離したものとは捉えられなかったようであった。

第２回では、場の特性も話し合いに大きな影響を与えた。第１回は市民交流施設内の一室で行ったが、第２回はにぎやかな商業施設のオープンスペースで行ったため、参加者は互いの声を聞き取るため顔を寄せ合う必要があった。さらに、図７、８が示すように、話し合いで使用した机が丸く小さなものであったことから、参加者の距離が縮まり、非常に親密な雰囲気が形成された。このように、第２回の進行はスムーズで場の雰囲気も良かったが、話し合いという観点からは以下の問題が残された。

（８）第２回の問題点

ａ．親密な雰囲気で話し合いが進んだため、問いから逸れ、互いについての質問をしあうような方向性を持たない雑談の時間が多かった。

ｂ．コミュニケーション不足を解決するためのアイディアが抽象的で、かつ答えの方向性が参加者間で似通っていたため、価値観の異なりが可視化されず、結果、意見のすり合わせのプロセスが生じなかった。

（８ａ）は参加者間の交流という意味では非常に素晴らしいことであるが、先に定義をした話し合いとして見た場合には、方向性を持たない雑談の多さは必ずしも望ましいことではない。より深刻な課題は（８ｂ）である。参加者が出した「コミュニケーション不足を解決するためのアイディア」は、「たくさん話す」「自分の気持ちを伝える」等、具体的な方法論を欠くもの、もしくは「思いやりの心を持つ」「相手の気持ちを考える」等、抽象

的なものが多かった。これらの答えは抽象的であるが前向きであるため否定しがたく、結果、第２回の話し合いにおいても、参加者間の「意見のすり合わせ」を経てグループとして意見を集約し「意思決定」していくプロセスが生じなかった。

一方で、話し合いの様子を細かに観察すると、指示カードの問いから逸れた雑談的なやりとりの中から、付箋に書かれたアイディアよりもより具体的で本質的なアイディアが導き出される様子が見られた。例えば、あるグループで、40代の技能実習生が、通訳を介し、日本語は全く分からないが子どもの学費を稼ぐために日本に来たと話したところ、日本人住民の１人（日）が、自分も子どものために40代で新たな仕事を始めたことを語り、このやりとりを以下のように総括した。

（９）第２回の話し合いの一部

日：なんか「違う違う」じゃなくて、同じ共通点をこう見つけていくっていうのが一番いいと思うんですけど。日本人ってどうしても、同じ、なんていうかな、違うとこを見つける、「あなたと私は違うよね」っていうのが多いので、できれば「あ、同じ、同じ」っていうところを見つけていくと。

通訳：ああ、そうですよね。

日：うーん、それにはやっぱり話してから、「え、それって私も」って、だからいっぱい話してると、何かが絶対、共通点は出てくると思う。

4.4　第３回―公共の場でのイライラについて考える

4.4.1　第３回の話し合いの狙い

第３回は通訳を含め25名が参加し、５グループに分かれて話し合いを行った。第３回のテーマを考える事前の打ち合わせの中で、劇団より寸劇に関し新たな提案がなされた。それは、寸劇を前半の演劇ワークの中に入れ込み、劇としてではなく、その場で実際に起きていることとして参加者に提示するというものである。具体的には、劇団の主宰者が、演劇ワークを進める中で、他の若手の劇団員の行動に「イライラ」し、彼らを注意する・叱るという場面を４つ挿入する。参加者は鑑賞者としてそれを観るのではなく、まさにその場の当事者として各場面を「体験」する。そうする

ことで、参加者の中により実際に近い感情が引き起こされ、話し合いでの意見も出やすくなるのではないかということであった。これは、第１回、第２回の経験を経て、劇団がこの多文化ＷＳの目的とＷＳの中での寸劇の位置づけを深く理解したからこそなされた提案である。

この提案を受け、第３回の話し合いテーマは「公共の場でのイライラについて考える」とした。公共の場でどのようなことに「イライラ」するのかを語ることは（例：電車内で電話をしている人に「イライラ」する）、自らが規範とする暗黙のルール（例：電車の中で電話をすることはルール違反である）を明示することであると考えられる。これは、生活の場での共生を考えるうえで重要な前提の共有となりうる。また、体験型の寸劇により、他者の「イライラ」を目撃することで、類似の場面が想起されやすくなり、第２回のように抽象的な理想論に終始することなく、具体に即したやりとりが生じるのではないかと考えた。ただし、体験型の寸劇や「イライラ」というネガティブな感情について語ることは、参加者に過度のストレスや不安を与えることにもつながりかねない。そのため、一部の通訳には運営の意図を伝え、現場の運営者とともに参加者の様子を見守ってもらった。

4.4.2　第３回の寸劇

今回の寸劇は、それが演技であることが演劇ワークの最後まで明かされないため、これまで行っていた多言語併記のシナリオの事前配布をとりやめた。シナリオという言語情報がなくても参加者が今何が起きているのかを理解できるよう、劇団の主宰者が「イライラ」する原因をできる限り日常的で分かりやすいものにすると同時に（劇団員の挨拶がないこと、遅刻、携帯、おしゃべり）、演技であることを明かした時にシンプルなイラストで各場面で起きた出来事を再提示した（図９）。

（10）第３回寸劇の一部（携帯編）

※　この間にＫが地面に座ってスマホを見て、Ｎに怒られる。

Ｎ　「ちょっとごめんなさいね！おい！Ｋ！何やってんだよ！」

Ｋ　「（座って、スマホを操作してる）あ、いや、すみません、ちょっと今、急な連絡があって」

Ｎ　「今、ワークショップの最中だよ？お前、アシスタントでしょ？」

K　「はい、すみません！」
N　「仕事中に、スマホはダメだろ？」
K　「すみません！」
N　「すぐそうやって謝るけどさ、謝ったら済むと思ってない？」
K　「イエ、そんなこと思ってないです」
N　「絶対コイツ謝ったら済むと思ってるんですよ、すみません、なんか監督不行き届きで、次に行きます！」

図９　寸劇の場面を表したイラストの一部

4.4.3　第３回の話し合いにおける工夫

第３回の話し合いで使用されたツールは、先述の寸劇の場面を示す４枚のイラスト（図９参照）、指示カード、付箋の３つである。第３回では、話し合うべき感情は「イライラ」に統一されているため、感情カードは使用しなかった。指示カードは、第２回の話し合いの進行において非常に有効に機能したため、今回も同様の形で取り入れた。指示カードで示した問いは以下の通りである。

（11）第３回の話し合いで指示カードにより与えられた問い
ａ．４枚のイラストを見てください。あなたが経験した場面はありますか。そのとき、あなたはＡですか。Ｂですか。
ｂ．まちで／会社で／学校でイライラする人を書いてください。できるだけたくさん書いてください。そしてみんなに見せましょう。どうしてイライラするか、話しましょう。（どの言葉でもＯＫ！）
ｃ．みんなのイライラの中で、どれが一番印象的でしたか。１つ選んでください。

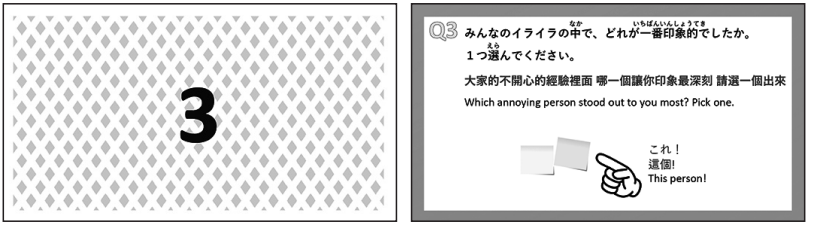

図10　第３回指示カードの表面と裏面

（11ａ）は寸劇と話し合いを接続するための問いである（問い中の「A」とは「イライラする側」、「B」とは「イライラされる側」を指す）。この問いを通じて、参加者が寸劇中の出来事を手掛かりに自らの経験を想起し、続く（11b）でより多くの具体的エピソードを提示することを期待した。（11ｂ）では、第２回と同様に付箋を用い、自分が「イライラ」する対象をできるだけ多く挙げてもらった。付箋の使用にあたっては、前回同様、日本語に限らずどの言語で書いても良いことを伝えた。最後に（11ｃ）は、グループ内およびグループ間の意見共有のための問いである。第１回、第２回では、話し合いの後、グループの代表者が話し合いの内容をまとめ全体に共有する時間が設けられていた（表３⑤）。しかし、このような形の成果共有は、代表者の主観で話し合い内容が編集されるため、発表内容と実際の話し合い内容が乖離したり、少数意見や、例えば4.3.4節で紹介したような筆者らから見て面白いと感じる細部が抜け落ちてしまうという課題があった。そこで、第３回では、話し合い内容の発表はやめ、話し合いの後に、参加者が各グループの付箋を見て回り、その中から１つ印象に残ったものを選ぶというプロセスを加えた。これにより、参加者が、人はどのようなふるまいに「イライラ」しうるのか、より多様な意見に触れることで、視野を広げることができると考えた。

4.4.4　第３回の問題点

第３回は、寸劇の内容と話し合いのテーマが最もうまく結びついた回となった。特に外国人住民にとっては、社会的立場が上である劇団主宰者が、相対的に立場が下である劇団員に「イライラ」を感じる場面が、彼らの実生活での経験とリアルにつながったようで、会社で理不尽に叱られた経験や、ホストファミリーとの確執等、就労の場や生活の場で感じる非常

に具体的な「イライラ」が数多く語られた。第３回に参加した外国人住民はこれまでと同様日本語初級レベルの者がほとんどであったが、その発話量も第１回、第２回と比べ明らかに多く、内容も具体的で深い自己開示を伴うものであった。

このように、第３回の話し合いは、第１回の課題であった寸劇と話し合いの接続、話し合いの進行における問題が解消され、さらに第２回の課題であった問いから逸れた雑談もほとんど見られず、話し合いのテーマである「イライラ」についての具体的なやりとりが展開された。その一方で、第１回と第２回共通の課題であった、「意見のすり合わせ」「意思決定」というプロセスは、第３回でも生じなかった。というよりも、第３回では、先述の通り、成果共有のあり方の改善を重視した結果、そもそも「意見のすり合わせ」や「意思決定」を引き起こすような問いが指示カードの中に含まれていなかった。この点は、本実践において、解決されない課題として残り続けている。

5. まとめ

以上、本稿では、江別市で多文化ＷＳを始めた背景と多文化ＷＳが目指す市のかたちを説明したうえで、多様な住民間の対等な話し合いの場を創出するために行った演劇ワークショップおよび話し合いのデザインについて詳述した。３回の実践の中で、話し合いに不慣れな参加者や日本語能力が比較的低い参加者でも十全に話し合いに参加できるよう、寸劇の内容や伝達補助ツールの使用を見直し、劇団やデザイナーと協働しながら話し合いのデザインの修正を繰り返してきた。しかし、話し合いに必要なプロセスである参加者間の「意見のすり合わせ」や「意思決定」はいまだ十分に実現できていない。一方で、話し合いを細かに観察していくと、参加者が、筆者らが予期せぬ感情カードの用い方を発見したり（平田・杜 2023、山本（本特集内））、4.3.4節（９）の例のように運営の指示から逸れた雑談の中で共生のための重要な気づきを得たりする様子が見られた。このようなデザインの余白ともいえる部分で参加者が自発的にとった行動もまた、本ＷＳの目的達成に寄与するものであった。

多文化ＷＳの取り組みはまだその途上にある。今後も、実践を通して、前準備としての演劇ワーク・寸劇および話し合いデザインの修正を重ねつつ、同時にＷＳの場で起きている微細な現象を観察していくことで、共生

のまちづくりに資する住民間の話し合いの場とはどのようなものであるのか考え続けたい。

注：

1）本稿では、日本以外の地域につながりを持つ住民を「外国人住民」と呼び、それ以外の住民を「日本人住民」と呼ぶ。「外国人住民」の中には、日本国籍を持つ者もおり、本ＷＳにもそのような参加者が含まれる。

2）インタビューは約１時間、日本語もしくは通訳を伴い相手の母語で行った。なお、本稿の引用は通訳が日本語訳した内容も含む。

3）市内には、地域住民と市内の大学に通う大学生が協働するまちづくり団体がいくつか存在し、新しい住民と地域の交流を促進する活動を行っているが、それらの団体においても近年の外国人住民の増加は認識されておらず、取り組みの対象に外国人住民は含まれていないようであった。

4）この後、実際に日本に来てみた感想を聞いたところ、彼は「江別の人は外国人に慣れていない。バスに乗ったら、私の隣に誰も座らない」「日本人は友達になりにくいと思う」など、当初抱いていた日本への漠然とした肯定的イメージと、江別市での実際の経験との間のギャップを語った。彼は来日してまだ３カ月である。今は「これからも日本にいる理由を探している」ということである。

5）「みんなでつくる多文化えんげきワークショップ」パブコメ募集冊子 https://shakehokkaido.studio.site/6（2024年１月閲覧）

6）以下に示す寸劇シナリオはすべて、劇団ELEVEN NINES主宰・納谷真大氏が本ＷＳのために書き下ろしたシナリオからの引用である。

7）シナリオ内の方言は創作である。

参考文献：

糸永浩司（2012）「移住・環住による農村コミュニティのレジリエンス」『農村計画学会誌』30(4)，562-566.

上林千恵子（2020）「特定技能制度の性格とその社会的影響－外国人労働者受け入れ制度の比較を手がかりとして」『日本労働研究雑誌』62，20-28.

佐藤徹（2023）「まちづくりへの参加と対話は人々にどのような変化をもたらすのか－まちづくりワークショップにおける対話の効果に関する研究デザイン」『日本地域政策研究』30，4-13.
出入国在留管理庁（2023ａ）「在留外国人統計」（2023年６月末）
https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html（2024年１月検索）
出入国在留管理庁（2023ｂ）「令和５年６月末現在における在留外国人数について」（2023年10月13日発表）
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00036.html（2024年１月検索）
ネウストプニー Ｊ．Ｖ．（1997）「言語管理とコミュニティ言語の諸問題」『多言語・多文化コミュニティのための言語管理』pp.21-38，国立国語研究所.
平田未季（2023）「国際交流団体による地域日本語教室の開設－ハレの国際交流から日常の学習支援へ」『日本語・国際教育研究紀要』26，42-65.
平田未季・杜長俊（2023）「接触場面における感情カードを用いた関与領域の拡張と理解の提示－日本語母語話者と非母語話者による対等な話し合いを目指して」『人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会（SLUD）第98回研究会予稿集』7-12.
北海道（2023）「住民基本台帳・世帯数」（令和５年）
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tuk/900brr/index2.html（2024年１月検索）
前田昌弘・高田光雄・森重幸子・西野克祐（2015）「京都市都心部における地蔵盆の運営実態と参加者の多様性－レジリエントなコミュニティ形成に果たす地蔵盆の役割に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』80(714)，1833-1843.
水上悦雄・村田和代・森本郁代（2023）「まちづくりプロジェクトにおける話し合いと参加者の変容について－社会課題と“話し合い”研究例として」『言語・音声理解と対話処理研究会』97，15-18.
村田和代・井関崇博（2018）「話し合い学の領域と研究課題」村田和代（編）『話し合い研究の多様性を考える（シリーズ話し合い学をつくる２）』pp.1-19，ひつじ書房.

森本郁代（2017）「市民参加の観点から見た裁判員制度－模擬評議に見る専門家と市民の話し合いの様相と課題」『市民参加の話し合いを考える（シリーズ話し合い学をつくる１）』pp.75-96，ひつじ書房.
Fan, Sau Kuen.（1994）Contact situation and language management. *Multilingua*, 13(3)，237-252.

ひらた　みき（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部准教授）